

男性と家事について

Christoffer Tigerstedt

西欧の家庭における男女間の家事分担については、多くの研究がなされている。そのほとんどが時間をどのように費やしたかという観点からの生活時間調査による。それらの研究では通常以下のように報告されている。女性の労働市場参画の増加、平等に向けた目標の普及、社会の圧力などにも関わらず、この 20 ～ 25 年の間、男性と女性の家事のパターンは驚くほど固定されたままである。この「停滞した革命」(Hochschild 1989)をどうすることができるか？

この疑問に真剣に取り組む研究はほとんどない。人材の観点や、社会化と性役割の観点と同様に、家事時間の価値を換算するような観点(South & Spitze 1994)といった既存のアプローチでは、この複雑な問題に取り組むことはできない。家事が妻と夫に分割されるとき、実際に何が起こるのか？どのような種類の議論が家事分担が取り決められるとき当事者によって用いられるのか？

しかし、近年では「ジェンダーの実行」(West & Zimmermann 1981)といった概念を用いた新しいアプローチが展開し、そして家庭は「ジェンダー工場」(Berk 1985)というジェンダーが作られる場として位置づけられた。そこでは、家事や家庭で行われる仕事は女性性や男性性、すなわちジェンダー関係が、(その他の社会的カテゴリー、階層、世代、民族、その他と同様に)日常生活の中で生産、再生産されている状況にあるとみなされるのである。このことは、家事に関する力学の象徴的、社会的および文化的様相の解析を可能にする。

家事の研究に関するいくつかの盲点があげられる。例えばフェミニストによる研究は主婦に関心をほとんど向けなかった。「停滞した革命」とは労働市場への女性の参画という顕著な進展にも関わらず、主婦という存在が完全には消えなかったことを意味する。確かに主婦は特有の社会的カテゴリーとしては、その舞台を去った。しかし「主婦」は、かなりの程度、特殊な家事能力という形態をとって多くの個々人の中に生き残ったように思える。しかもこの「後戻り的な現象」は、抑圧の結果だけではない。女性にほとんど所有されたこの能力は、家事が分担されるとき有力な駆け引きのチップとなる。

家事の面で西欧の夫らの特有の位置は何か？等しく家事をすること、父親の役割を担う

ことといった文化的期待の昨今の傾向に対して、夫らはいかに対処するのか？夫らの戦略は変化する。しかしいかなる場合にも、それらは妻そして子どもの視点にかなうものでなければならない。この相互作用の結果、すなわち家事労働に対して消極的、選択的、積極的な男性であるかどうかに関わらず、その行動パターンは社会的文化的構造として研究されねばならない。

多くの西欧の男性はなぜ家事をいやがるのか？おそらくそれは家事が〈女らしさ〉と結びつけられるか、少なくとも〈男らしさ〉とは結びつかないことによる。

第1に、家事は「破壊的」(Morgan, 1992)である。料理ができれば、消費され、部屋がきれいになってもほんの一時的である等、何かが完成するやいなや壊されてしまう。家事はその業績の積み上げに「直線的な性質」を全く欠いている。それはむしろ循環して、混沌として、反復的なプロセスに似ている。

これは、西欧の男女間のどんな平等が男性と女性それぞれを象徴するかについての議論と関連している。男性が限定された1つのプロジェクトに固執している間に、女性はより包括的でより大きい両性の平等プロジェクトに従事してきたように思える。例えば、女性が一般的な見解を作り上げようとしているのに、男性はこれまでとは違った家庭におけるさまざまな仕事にとまどいをおぼえているように思える。

第2に、象徴的に、また実際に家事は「汚い」(Morgan, 1992)。男性の汚い仕事、すなわち車や、肉体を使った鉱山での労働などは肯定的な〈男らしい〉ラベルを得る傾向がある。それは危険と勇気でいっぱいである。女性も同じく危険な仕事をする。しかしそれらの〈女らしい〉仕事では男性の仕事に伴うような公的な評価は得られない。

第3に、家事は匿名である。たとえこの匿名性が少しでも報いられることがあったとしても、家庭での「良い仕事」は公的に、そして明確には、報いられないだろう。両性の平等に関するイデオロギーは皮肉に満ちている。なぜなら、妻と夫とが平等であるべきということは、原則として妻と夫とが家庭での「良い仕事」に感謝を示すことを不要にするからである。

男性は家事をするとき、しばしば、自分が何かを捨てているように感じる。彼らは自己を犠牲にする。過去、男性の稼ぎ手と女性の主婦という文化的な規範が有効だったとき、状況は異なっていた。

日々、匿名の家庭の領域は、〈男らしい〉英雄的行為の場へと変換することがほとんどできない。男性にとって、これはうまく対処するのが難しいかもしれない。なぜなら男性は、仕事、スポーツ、仲間、パブといったいわゆる〈男らしさ〉をより発揮できる場で公然と、

公的に報いられることになれているからである。

「家事」の匿名性がなくなるや否や、夫らはより家事をすることがイヤでなくなる傾向がある。古典的な例として、友人と親類に示すことができるアパートの改造、特に北欧の男らしい行為？といわれる家の建築、友人からコメントをもらうことができるパーティーの食事の用意、賞賛のまなざしで見てもらえる乳母車を押すことなど。

要約すると、家庭に順応しようとする男性たちにとって破壊的であること、汚さ、匿名性といった家事の特徴は、男らしさのアイデンティティ形成にさまざまな問題をもたらす。

(森政淳子)